

共生のきずなを求めて!

NPO 現代座

2018 年 8 月 1 日 発行
(通巻 478 号)

現代座レポート No. 75

2018 年 5 月～2018 年 7 月

- ・敗戦記念日を迎え～満蒙開拓を振り返る (1)
- ・日本のコサック兵を育成せよ～満蒙開拓の始まり (2)
- ・満州引揚げ～多くの方々に助けられて 三村修一 (3)
- ・『遠い空の下の故郷』長野県公演の報告 木下美智子 (4)
- ・小金井市「名作朗読教室」を担当して 長谷川葉月 (5)
- ・平和って素敵だな 腹話術師いずみ (6)
- ・緑町ふれあいサロン～もうすぐ 5 周年 古明地節子 (7)
- ・トピックス お知らせ 会員入会、継続、寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX 042-381-6987

敗戦記念日を迎え

満蒙開拓を振り返る

木村 快

私はこのところ長野県下の戦後開拓地の跡を訪ね歩いていて。満蒙開拓の歴史を振り返ってみるためだ。

2017 年に NHK 長野は長らく間に閉ざされていた戦後開拓の実態を調べるため、情報公開法によって長野県庁に所蔵されていた「戦後開拓地域台帳附図」を閲覧。「日本列島く開拓村くもうひとつの戦後史」を放映した。画面では長野県に存在したであろう 219 地域の場所を赤い点で示している。それは私の予測を遙かに超えている。地名は明らかにされていないが、手当たり次第、知人のつてを頼りながら、せめてその痕跡だけでも辿ってみようと思っている。

◆豊かさのための臨時収容所

満蒙開拓く戦前生まれの人なら「何を今さら」と思われるだろうし、戦後生まれの人は言葉の意味もわからないかもしれない。「満蒙開拓」とは戦前、国の政策で旧満州（中国東北部）に開拓農民を送り込んだ事業である。27 万人におよぶ農民が移住している。しかし敗戦後は国に守られることも



何の痕跡もなくなった大峰開拓地跡から山麓の市街を望む。

なく、悲劇的な逃避行で 8 万人以上が命を失った。命からがら日本に引き揚げた人々は「自分で生きて行け」と僻地の未開墾地へ放り込まれた。そのほとんどは高度 700 以上の山間地である。電気も水もない極貧の生活を強いられた人々の光景が目につく。

ところが 1960 年代の経済成長期に入ると、国は都市の労働力を確保するため、開拓民に開拓地からの離農を迫る。つまり、戦後開拓とは引揚者を一時収容する場所だったのである。

1980 年代、私は北海道各地の戦後開拓地取材し、舞台作品『風は故郷へ』を全国 158 自治体で上演したことがある。取材の詳細は省くが、戦後開拓の事情を知ると、国の歴史が個人の運不運の問題にすり替わら

れ、消えていく怖さを感じはじめた。

◆開拓地は観光地へ、そして廃墟へ

その後 GNP 大国となると食料は外国から輸入し、豊かさを満喫するため国の総合保養地域整備法（リゾート法）が制定される。開拓民の土地は開発費不要の絶好の候補地となり、安い価格で買い上げられ、スキー場、ゴルフ場、別荘地へと姿を変えていった。そしてバブル崩壊でブームが去ると企業は撤退。現在では廃墟への道を歩んでいる。あの人々の苦勞はいったい何だったのか。語り継ぐべき大きな問題はなかったのか。各地の公民館や行政の窓口を訪ねても、もう戦後開拓地のことからはわからなくなっている。すべては過去の間に消えつつあるようだ。そしてこの国は、また同じ過ちを繰り返すことになるのかもしれない。

◆運の悪い人間はどこへ消えたのか

長野県は満蒙開拓についての貴重な記録を残す県である。戦争にひた走った最後の 10 年間に送られた開拓移民 27 万人のうち、長野県は独自に 50 万人以上の開拓村を開設し、3 万 5 千人の県民を送っている。飯田市歴史研究所には満蒙開拓の資料が整備されている。その後、はたして運の悪い人たちはどうなったのか。以下次ページ

満蒙開拓はどのようにして始まったか 日本のコサック兵を育成せよ

◆満州移住計画の始まり

満蒙開拓の父と呼ばれた東宮鐵夫(とうみや・かねお)は、大正9年のロシア革命を制圧するためのシベリア出兵に、日本軍の歩兵将校として参加している。この時、ソビエト側の精鋭であるコサック兵が、シベリアで農業を営みながら国境を守備する武装農民であることを知り、日本側でも満州にコサックのような武装農民を育成できないものかと考えた。



東宮鐵夫

東宮は昭和3年、関東軍の独断で行われた張作霖爆殺事件の担当者だった。この事件は戦前は「満州某重大事件」と呼ばれ公表されなかったが、時の田中内閣は総辞職に追い込まれている。

昭和6年、東宮は満州移民計画を軍上層部に提出している。昭和7年3月、日本が国際的な批判を無視して満州帝国の建国を強行すると、拓務省は東大出の農本主義者として知られた加藤完治を招聘し、東宮とともに満州移民計画の検討を始める。東宮の計画では、日本人は満州のような極寒の地での農業は無理と考え、寒冷地農業の経験のある朝鮮人を移住させ、それを日本の在郷軍人に統率させる計画だった。加藤は日本人による共同体が土台に必要であると主張。両者検討の結果、在郷軍人主体の開拓移民団計画に取りかかる。

◆満蒙開拓計画・新資料の発見

2006年頃、東宮の生家で満蒙開拓計画にかかわる詳細な資料が多数発見された。そこで2006年8月11日放映のNHKスペシャル『満蒙開拓団はこうして送られた―眠っていた関東軍将校の資料―』で報じられた内容を要約する。

要点は、①計画は当初から陸軍の大隊を想定していたこと、②これに対して民間から招聘された移住問題の専門家・永田桐(ながた・しげし)から計画立案書への厳しい忠告があり、論戦が交わされていたことである。

昭和7年6月、関東軍指令部に提出された「吉林頓墾軍機関隊編成員申書」には日本軍に代わり永続的に防衛の任務を担う武装移民団の育成を目的とし、移民団を頓墾(とんこん)軍と名付けている。編成は将校7人、准士官10人、下士官30人、隊員は朝鮮人を含む300人で1大隊を構成するというものである。常備する武器は小銃88丁、騎兵銃33丁、拳銃177丁、その他弾薬類100キロである。

翌昭和8年、兵役を終えた在郷軍人から第1次試験移民を選び、移民団493人がソビエトとの国境に近い吉林省佳木斯(ジャムス)近辺の永豊鎮に入植する。予定地2千畝の民有地の半分はすでに耕作地であったが、中国人居住者を1人あたり5円(放映当時の価格で2万円程度)で強制的に立ち退かせている。この強引な土地の獲得は中国農民の憤激を買い、強い反日気運を生み出した。

昭和8年4月、本格的な入植が開始され、開拓地は弥栄(いやさか)村と名付けられた。しかし、重労働と極度の緊張感で大腸カタル、アメーバ赤痢、風土病などに冒され、500人中300人が病気を抱え、屯墾病と呼ばれていた。7月には移民団の中で幹部排斥運動が起こり、拓務省宛に「屯墾隊員は屯墾軍第一大隊幹部の総辞職勧告を決議する」との決議文が送られている。移民団は崩壊の危機に直面していた。東宮、加藤が收拾に乗り出し、なんとか幹部排斥だけは防ぎ止めたものの、事態はますます深刻化する。

◆永田桐と東宮の「国賊」論争

昭和8年11月、関東軍移民部は入植方法再検討のため、視察団を派遣している。このとき永田桐がまとめた18項目80頁にわたる報告書では、自立した農業経営の視点が全く欠落しており、強制排除された満州人約90戸が家を失い、直ちに生活の脅威を受けたことが匪賊より脅威を受ける遠



因の一つになっている。早急に計画を改善すべきだと進言。

これに対して東宮は「満州人と日本人移民との間で、支配する側とされる側の関係ができるのは当然だ。帝国百年の移民国策の立案に当たり、新日本建設前衛の移民地に文句をつける輩は国賊と言ふべきだ」と反論している。

永田は「最も忠実な支援をしようと苦言を呈する者を文句をつける輩と見る目は、それ自体において盲目だ!」と関東軍移民部から去っている。結局、永田の忠告が検討されることはなかった。

東宮の満州開拓計画は、実行から一年で大きな課題を抱え、危機に直面するが、軍や政府はひた隠しにし、移民団を賛美する情報だけが流布され、試験移民計画はさらに第2次、第3次と推進されていった。

◆少年たちまで動員した満州移住

この後、昭和10年に東宮は拓務省、加藤完治らと協議し、新たな移民計画を具申している。その内容は、単身者だけでなく、3年間に3万家族10万人を送るといったものである。当初の単身移住から家族移住へと転換したわけである。この具申書が大量の満州移民につながることになる。

昭和11年3月、広田内閣は7大國策の一つとして20年間で百万戸・5百万人の移住計画を打ち出した。関東軍はすでに満州国人口の1割を日本人にする計画を立てていた。

昭和12年に日中戦争開始、翌13年からはさらに14歳〜19歳までの少年達が満蒙開拓青少年義勇軍として送られていく。長野県の「満蒙開拓平和記念館作成の満州開拓移民入植地図」によると、全国で組織された8百に及ぶ開拓団で満州全土が埋め尽くされている。こうして満州に送り出された移民は昭和20年8月までに27万人に達した。

しかしソビエト軍の侵攻に伴い、移住民は戦闘に巻き込まれる。日本軍は満州南部に撤退し、移住民は見捨てられ、8万人が命を失った。

(要約・木村快)

多くの方々に助けられて

三村修一



*すでに何人もの方から満家移住の体験を伺っているが、逃避行中に13歳で両親が亡くなり、2人の幼い妹を抱えての生活を送った三村修一さん。「少年の心に映った満家からの引き揚げ体験」について一部を要約させていただきます。

(木村)

◆満州への移住

私は昭和7年12月生まれです。長野県岡谷市で生まれました。満州へ渡ったのは昭和20年6月で敗戦直前です。

父は小さなお菓子屋をやっていたのですが、職人さんがみな兵隊に取られてやれなくなり、昭和18年頃、岡谷市から、開拓団をつくるから経理係長として行ってくれないかと頼まれたようです。それで満州に渡ってハルピンで農場幹部の研修を受け、昭和20年4月に突然帰ってきて、これから一家で満州に行くと言いだしたんです。

私はちょうど国民学校6年を終了したところで、満12歳になったばかりです。何がだかわからないまま満州へ渡りました。満州ペイアン(北安)省甲陽北の果てです。父、母、私、7歳と5歳の妹、3歳の弟と一家6人です。長野県岡谷開拓団は最後の満州開拓団で35所帯、1500人でした。ところが着いた途端に大人の男性は全員召集令状が来て、軍隊に連れて行かれました。残ったのは女、子ども、年寄りだけ。どうしてあんなひどいことをしたのでしょうか。あとで聞くと、これはほかの開拓団でも同じだったようです。

◆逃避行

8月の14日に突然、「ソ連軍が来るから逃げろ」ということで、女、子ども、年寄りだけで、着の身着のまま開拓地を出て、ペイアンの街に向かいました。昼は草むらに隠れ、夜になって歩きました。また連悪く連日の大雨で、低地は簡単には渡れない河になっていました。年寄りや幼い子ど

もが取り残され、流されますが、助けることも出来ないのです。

心配した現地人の襲撃はありませんでした。それどころか、現地人の畑のモロコシやトマトを盗んで飢えをしのぐ私たちを咎めることもなく、黙って見過ごしてくれました。ありがたかったです。

◆長春の収容所

9月にペイアンから貨車に乗って新京へ向かいました。新京には南満州鉄道の社員寮があり、そこに収容されました。夏着のままです。食糧が乏しい上、シロミを媒介にした発疹チブスが流行し、多くの人が亡くなり、ひと月もたないうちに小さい弟が亡くなりました。

そんなとき、シベリアへ連行される途中で逃げ出した父が、ずっと歩いて収容所にたどり着きました。そのときはとてもうれしかったのですが、21年の年が明けると、父と母は相次いで亡くなりました。遺体は零下40度で力チンカチンに凍り、窓から外へ投げるとカランカランと音がしました。お線香を上げること出来ませんでした。

◆満州人に助けられて

13歳になつたばかりの私が親代わりで、小さい妹たちを養わなければなりません。石炭の燃えかすを野積みにした場所があつて、まだ燃えそうなコークスを拾い集め、満州人の家庭に売って歩きました。リュック一杯で5円になり、それでなんとか食べ物を買うことが出来ました。

いつも声をかけてくれ、必ず買ってくれる満州人の家がありました。「家族はどうしてる?」と聞かれて小さい妹が二人いるというのと、妹たちに食べさせる」とマントウ(饅頭)を包んでくれるのでした。

また、その家主さんは痩せ細っているわたしを哀れに思い「精のつくものがあるぞ」と、長野のこの辺では「ネンポロ」と言いますが、小さい玉ねぎのような山菜をくれ、「これをおからと混ぜて食べなさい」と、味噌や醤油も分けてくれました。それからは妹たちとネンポロを穫って歩き、おからに混ぜて食べました。これを食べるようになってか

ら体力も回復し、妹たちも元気になりました。

9月に引揚港錦秋へ出発するとき、その方々に挨拶にくと、「気をつけて」と、お金をくれました。あの方たちは本当に感謝してもしきれません。

町で会ういつも元気づけてくれる日本人のお姉さんにも挨拶に行くと、「列車の中で食べなさい」とわざわざ乾燥させたコオリヤンのご飯を作って袋に詰め、リュックの底に入れてくれました。もう一人の別のお姉さんはたぶん満州人と結婚されたのでしょうか。「わたしと一緒に帰れないけど、気をつけてね」とお金を渡してくれました。

私たちは親を亡くし、子ども3人だけだったので、見ず知らずの方々からとても親切にしてくださいました。たとえ異国でもお付き合いの仕方だいで心が通い、助けてもらえるものだと思います。

◆みなさんに感謝

貨車や客車を乗り継ぎ錦秋へ向かいましたが、ここでまたコレラが流行し、多くの方がなくなりました。船も出航できません。博多港に着いたのは昭和21年12月。岡谷市に帰り着いたとき14歳になりました。ちょうど1年半ぶりです。岡谷市の配慮で銭湯に入浴、新しい服を着せて貰い、腹一杯ご飯をいただきました。本当においしかったです。そして開拓団で亡くなった人たちと一緒に父、母、弟の葬儀も開いていただきました。

私たちは波田村の叔父がしばらく預かってくれることになり、妹たちは念願の小学校へ入学できました。私も中学へ行きかけたけど、もう14歳なので大人と一緒に働くことにしました。ちょうど国の方針で、波田村が新しい開拓地を準備してくれました。引揚者14世帯で協同開拓することになり、一生懸命働きました。おかげで妹たちと一緒に暮らすことが出来ました。それからいろいろなことがあり、残念ながら妻が昨年亡くなったのですが、85歳になるまで、こうして無事に暮らしています。皆さんには本当に感謝しています。

『遠い空の下の故郷』 ハンセン病療養所に生きて

木下美智子



◆長野市「遠い空の下の故郷」 長野合唱団ホール



語り・木下美智子

長野市公演
ピアノ 伊藤ゆかり大町市公演
アコーディオン
今村純二

◆大町市「人権を考える市民の集い」 大町第1中学校体育館

九州のハンセン病療養所で暮らしている2人の女性の人生を語るこの活動は、この5月、6月で106回目の公演になりました。

◆5月19日(土) 長野市(105回目)

長野合唱団の練習所である「長野合唱団ホール」を会場に、合唱団の有志が実行委員会を作って取り組んでくれました。一昨年伊那市での公演で演奏してくれた伊藤ゆかりさんが、「木下さんと快さんが介護生活で長野にいるなら何もしないのもつたない。長野合唱団の古澤団長は古くからの現代座会員だから、まずは合唱団のメンバーに聞いてもらって、心を伝える事を考える場にした」と、合唱団のメンバーに呼びかけてくれたのです。

伊藤さんは今は伊那市在住ですが、以前は長野合唱団でも伴奏をし、今も長野市で子ども達にピアノを教えています。

伊藤さんの呼びかけに答え、事務局の常田さんを先頭に実行委員がチラシを作り、チケットを売り、色々な所に呼びかけてくれました。また自分たちもこの場に歌で参加しようと、「彼方に」という15歳で島の療養所に渡った鳥栖喬さんを歌ったうたを稽古して、私の語りのあとに歌ってくれました。50人でいっぱいの小さな会場だったこともあって、気持ちがあるまま伝わっていくのを感じ、伊藤さんのピアノに支えられて、心のままに語る事ができました。

新しい出会いに感謝です。

◆6月14日(木) 長野県大町市(106回目)

昨年に引き続き大町市「人権を考える市民の集い」に呼んでいただきました。今年は大町第一中学校体育館を会場に、中学生と先生方、そして市民の皆様300人が参加してくださいました。中学生は毎年この時期に「人権」を考える学習をしています。その一環としてこのハンセン病療養所で生きる人の語りを聞いていただきました。

食い入るように聞いてくださった生徒さん達から、後日多くの感想文が届きました。とても深く受け止めてくださった事にびっくりしました。

余白の関係で一例だけ紹介させていただきます。

* * * * *

◆私は「ハンセン病」という病名を少し前に行われた学年集会で知りました。興味がなかったのでは無く、関わったことがなかったからです。関わった事がないのなら知らなくてもいいと思っていました。でも私は学年集会や今回の講演会とおして「なぜ今まで知らなかったのだろう」と後悔をしました。今までずっとみんなと同じ扱いだっただのに、態度が急に変わったたりすることがあるんだと初めて知ったし、私にはあまり関係ないと思っていたけれど、自分にもおこりえる事だと感じました。この日本で、国が「差別」につながるようなこと、差別をまきおこしていたことを知ってびっくりしました。もう2度とこのような事がおこらないといいなと心から思いました。また私にはやりたい事が出来ました。私は自分の後悔を穴うめするわけではないけど、国内のハンセン病療養所に行つて、ハンセン病の人と関わつてみたいと思いました。機会があれば行つてみたいと思います。(2年生女子)

「いきいき楽々名作朗読教室」開催

講師 長谷川葉月

昨年の夏のこと、小金井市社会福祉協議会から、2018年度の朗読講座の講師依頼がありました。社会福祉協議会では高齢者のための様々な講座を開催していて、朗読も人気の講座の一つだそうです。正直、私もよらぬところからの申し出に驚いてしまいました。というのも、私が現代座で朗読講座を始めてから、まだ2年と経っていない時期で、こういう小さな活動を拾いあげてくれることに感激し、「喜んでお引き受けいたします！」と、威勢よく答えました。

さて、半年以上の準備期間を経て、「いきいき楽々名作朗読教室」は5月10日～6月14日の毎週木曜日の午後2時～4時の全6回の講座と決まりました。テキストには、芥川龍之介『杜子春（とししゅん）』を選定。芥川作品はとにかくドラマチックで心理描写や情景描写の素晴らしさはもちろん、会話も豊富に散りばめられていて、飽きる事なく読みを深めることができるからです。ただ、私にとって心配の種は、短時間に大勢の人と向き合うことでした。現代座の朗読講座



平成30年度 高齢者いきいき活動講座
「いきいき楽々名作朗読教室」の冊子

は定員8名ですが、今回は2時間で定員15名という倍の人数。かなりハードだろうという予想がついたので、事前に全6回の細かなタイムスケジュールを組んで臨むことにしました。「飽きずに楽しく、そして少しでもたくさん分量を読んでもらうには…」と考えている私の元に、担当者から「定員以上の18名の応募がありました。がみなさん熱心なので全員参加としました」とメールが届いたときは、思わずキュッと胃が縮み、「基礎訓練のあと、正味85分で一人あたり何分読めるのかしら？ 4分ちよつとかあ、文句が出たりしないかな…」と電卓を片手に焦りました。が、蓋を開けてみれば欠席者も多く、参加者は14名でした。では講座の内容を振り返りたいと思います。

* * *

●第1回 長机を口の字に並べて、体操・発声、発音は毎回行う基礎訓練。そのあとテキスト『杜子春』を配布する。初見なので、まずはみんなで読み繋いでいて全体の内容を把握してもらう。1ページずつ読んでもらったが、どんなに短くても全員にコメントするのは思いのほか大変なものと、名札がないため名前を覚えてもらえずに困った。4時ギリギリに来週の朗読部分を告げて、なんとか終わる。担当者には欠席者にテキストを送付するように依頼したが、戸惑いながらも快く引き受けてくださったのが有り難い。

●第2回 『杜子春』の前半を分け読みする。読みの順番はクジ引きで公平に。今回は丁寧にコメントしすぎて大失敗。時間切れで3名も人が読むことができなかつた。なので、次は優先的に声をだしてもらうことを約束する。しかし、とにかく朗読の具体的なポイントのうち「声のコントロール」「アクセント」「3

つのない」「句読点の振り直し」の説明はできた。経験者も初心者も熱心にうなずいている。

●第3回・第4回 『杜子春』中盤の分け読みをする。豊富な会話文と臨場感あふれる情景描写をどう読むか、読み手の感情の揺れ動きが朗読表現にいかにか大事かを学ぶのに最適な部分だと思ふ。具体的な指摘を心がけて「イントネーション」「プロミネンス」の説明をする。声を聞いていると、自宅でかなり予習しているのと明確に分かる人もいて私を驚かせた。もちろん練習してこなくても良いのだけれど、何度も読めばそれだけ自信がつくし、楽しくなるし、声も若返るからだ。やっと全員の顔と名前が一致し、ひと安心。講座のあとにしつこく尋ねる人がいたが、そのことが私の教え方の工夫に、かえって役立った。

●第5回 『杜子春』後半部分の分け読みをする。途中で私が「来週は全員同じ部分を発表してもらいますが、それは今日分け読みしているこのクライマックスの部分です」と告げたので、「えっ」という声がかかるかと思いきや、意外にも全員が今まで以上に他の人の朗読に耳を傾けるという結果になった。発表にむけての熱意が伝わってきて頼もしい。

●第6回 発表の時、椅子を円く並べて輪になって一人ずつ朗読発表したのが良かったらしい。独特の一体感が生まれて初日とは別人の朗読と思える読みも多く、担当者も驚いていた。私も大いに拍手した。個人的には最後に上手なまとめができないのが心残りだった。

* * *

かなり駆け足の講座内容でしたが、受講者のアンケートも概ね好評で来年度の実施も決まりました。朗読が身近な趣味として広まっていくのは嬉しい限りです。

『Piece of Peace ～平和のかけら』

平和つて素敵だな

腹話術師いずみ

5月12日、五月晴れの中『Piece of Peace～平和のかけら』腹話術とパントマイムの公演を、現代座の地下劇場にて開催いたしました。おかげさまで、昼の部夜の部ともに80名のお客さまで満員御礼となりました。

昨年の7月、地下の現代座会館を見て「なんてレトロでステキな劇場だろう」と思つると同時に「この舞台で腹話術を



ピアノ・齋藤ちゃくら お人形のけんちゃん、腹話術師いずみ、金子しんべい

したい！」と夢がふくらんだのです。しかし、はっと気がつきました。私1人では何も出来ない！まずは共演して下さる方に依頼しなくてはなりません。以前何回か一緒に演じたことがある、素晴らしいパントマイムを演ずる金子しんべいさん。そしてその演技をいつもサポートされているピアノニストの齋藤ちゃくらさん。このお二人にメッセージを送り、共演を快諾していただいたのです。さらに、この大きな舞台を支えてくださる舞台監督を、武川泰子さんが引き受けてくださいました。

せっかくこの現代座で上演するならば、地元小金井のみなさまと協力したいと考え、昨年平和音楽祭を企画された市民の皆さんに実行委員会を立ち上げてもらって、小金井市の後援を取りました。また、けやき通り商店会さん、京王通り商店会さんの各店舗にチラシを多数置いていただきました。

出演者共通の思いは「平和であること」。テーマは『Piece of Peace～平和のかけら』と決めました。金子さんは、ご自身の名作『花はどこへ行った』（ピートシガーのベトナム反戦歌に合わせたパントマイム作品）を、齋藤さんのピアノ伴奏と素晴らしい照明を元に演じてください

パントマイム
【花はどこへ行った】
金子しんべい

ました。私は『へいわつてすてきだね』（作・安里ゆうき、絵・長谷川義文）の読み聞かせを交えた腹話術をしました。齋藤ちゃくらさんは、『アメノクニ』というあたたかいオリジナル作品をソロで披露してくださいました。最後には3人でコラボ作品も演じました！笑いの中にも心があたたまる、そんな舞台を目指しました。お客様の感想には「また再演してほしい」「笑って、泣いた」など嬉しい感想をいただきました。

この公演を通して何かお役に立ちたいと思い、国分寺の『アフターケア相談所 ゆずりは』（児童養護施設などを退所した若者の相談所）さんへ、売り上げの一部3万2389円を寄付させていただきました。

あれよあれよと照明や客席を作り上げてくださった現代座のみなさん、協力してくださいました地元のお店のみなさん、協賛としてチケット4枚分を買い上

げてくださったみなさん、何より足を運んでくださったお客さま、心から感謝申し上げます。

私の小さな願いが、多くの方々のご協力によって大きく実現されました。なんとありがたく、なんと素晴らしいことでしょう。さらにさらに、多くのみなさまへ楽しさをお届けできるように、もっともっとお人形のけんちゃん共に羽ばたいていきたいと願います。



もうすぐ5周年・60回目を迎える

緑町ふれあいサロン

古明地節子



おかげさまで58回目が猛暑のなか、無事楽しく終わりました。

このサロンは、平成25年10月第1回目が開催されてから、毎月第3木曜日、午後1時半～3時半まで、天候に関係なく地域の方だけでも会費100円でご参加いただけます。

長い間、「この緑町の中でだけでも集えて、楽しいお話ができる場所が欲しい・・・」というのが念願でしたが、なかなか叶いませんでした。しかし、現代座のご好意でお部屋をお借りすることができました。スタッフを整え、「もし地域の皆さんにいらしていただけなかったらどうしよう」などと心配しましたが、皆様に支えられて全く心配は吹き飛んでしまいました。町でお会いした時、ご挨拶できる仲間がたくさんいる事は本当にすばらしいです。

サロンでのお話は、特別なテーマは決まってもませんが、四季折々の話題、政治から経済、旅行の話、介護保険、病気や病院の話、歌を唄ったり、詩吟を詠ったり、体操したり、現代座の俳優さんによる朗読もあつたり、又、最長老のIさんが毎月、季節の野草でテーブルセッティングをして下さり、心豊かな気持ちでサロンを開く事ができます。

又、地域包括支援センター、デイサービス、薬局さ

ん等のスタッフの方々も参加して下さい、最新の情報もいただく事ができ、皆さん真剣に聞き入る時もあります。又、近くの店にお願いして手作りのお茶菓子を作ってもらっています。

こうして地域の皆さん、参加される皆さんの協力によって、サロン活動が続けられているのだと、感謝の気持ちで一杯です。

もうすぐ5周年の「60回サロン」になります。素敵な企画がありませんか。皆様助っ人お願いします。

サロンスタッフ・古明地節子



現代座会館 5月～7月 活動日誌

5月13日 現代座創造グループ会議

20日 「現代座レポート74号」発送作業

6月30日 ブラジル・矢崎ナツ氏来訪

7月1日 現代座創造グループ会議

7月7日 SPレコード雑談会

7月16日 緑町第2町会役員会

毎月第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

【現代座ホール】

5月12日 腹話術とパントマイム「piece of peace」公演

14～29日 AUNワークシヨップ公演「から騒ぎ」稽古

30～6月3日 AUNワークシヨップ公演「から騒ぎ」

6月12～14日 劇団希望舞台「釈迦内転唄」稽古

25～30日 wonder works「トランスレイターズ」稽古

7月7～12日 ふるきやら「稲刈りの火」稽古

15～22日 wonder works「トランスレイターズ」稽古

23～8日 クロジ「いと恋いめやも」稽古

【三階小ホール】

5月17～27日 りんどうの会「心理試験」稽古と公演

7月4～8・21・22・27日 スタジオ・ボラーノ稽古

29日 津田リトルコンサート

隔水曜日 朗読教室

毎火曜日 ヨガ教室

【定期使用 一階サロン】

毎日曜日 教育文化経営学院(学生支援)

毎月曜日 子どもクラブ・バンビーノ

毎水曜日 熟年パソコンサークル

隔木曜日 iPad熟年講座



入場してみると、展示書籍の中に私の『共生の大地アリアンサ』のポルトガル語版が置かれていた。「アリアンサをご存じですか？」と声をかけてきた女性（右から2人目）は移民百周年記念フェスタ責任者の横谷マリアさん。木下美智子の出身校・長野県短大のポルトガル語の先生だという。「ではこちらはキムフさんですね」ということでスタッフが集まってきた。

握手・握手・握手。長野県在住の日系ブラジル人が協力し合って展示会を開いているのだという。本を展示してくれた賀沢マリアさん（右から3人目）はペレイラバレット市出身で、話を聞いていると私がいつもお訪ねする輪湖俊二郎家のお孫さんと同級生。「この本は去年里帰りしたとき、サンパウロ市で見つけて買い求めたんですよ」

思いがけない出逢い。地球の反対側の故郷にタイムトリップした思い。（木村）

トピックス



◆長野市の中心街に「ブラジル日本移民百十年の軌跡展」という手書きの看板がかけられていた。

お知らせ

第2回 川崎平右衛門研究会

川崎平右衛門顕彰会・研究会はNPO 現代座の『武蔵野の歌が聞こえる』上演活動を通して2017年5月に設立されました。

日時：平成30年10月12日（金）

場所：東京・参議院議員会館会議室
〒100-8962 千代田区永田町 2-1-1

参加費：3000円

お問合せ先：

川崎平右衛門顕彰会・研究会 木谷道宣

TEL 080-5895-3962

FAX 03-5767-8832

メール walk@tbz.t-com.ne.jp

*全体の詳細はまだ決まっておりませんが、次のような内容が準備されています。

講演 「川崎平右衛門と災害復興-自助・共助・公助-」
東京学芸大学副学長・教授 大石 学

語り 『武蔵野の歌が聞こえる』より
「協同事始め」 NPO 現代座

パネルディスカッション

「今甦れ！川崎平右衛門～いよいよ羽ばたく協同組合」

- ・ワーカーズ名誉理事 永戸祐三
- ・東京学芸大学副学長教授 大石 学
- ・同志社大学大学院教授 浜 矩子
- ・日本協同組合連携機構 代表理事専務 勝又 博三

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）

一般会員 3,000円

協賛会員 10,000円（1口以上）

郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座